
春色フリーフォール

深月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春色フリーフォール

【Nコード】

N6761V

【作者名】

深月織

【あらすじ】

あの春の日に、くるくる落ちた花片のように、あなたに恋をした

Webアンソロジー参加作品 調整改稿バージョン*

（前）

恋は落ちるもの。

そんな格言めいた言葉を実感したのは、その通りどうしようもなく落ちてしまってから、だった。

春色フリーフォール

「来週、お姉ちゃんこっち来るって」

その言葉に、一瞬箸を持つ手が止まった。

「リョウちゃん連れて、お花見にでも行こうって言ってるんだけど。
弓緒ゆみおはどうする？」

さりげなさを装い、こちらの返事を求める母に、私は味噌汁を口
にすることで間を置く。

「……友だちと約束あるから。花見なら、蘇芳公園がちょうど見頃
らしいよ」

「ごちそうさま、と手を合わせ、さっさと重ねた食器を流しに運ぶ

私の後ろから、ため息混じりの母の声。

「アンタもいい加減ガンコねえ……」

……悪かったね。

母の発言には理由がある。

私が、姉である梓をずっと避けているから、それを何とかしよう
とあの手この手で懐柔してくるのだ。

姉が結婚して家を出てから三年、しばらくして産まれた甥っ子は
そろそろ二歳。まだ上手く喋れないながらも、叔母である私のこと
を「ゆーちゃ」と呼ぶのがメチャクチャかわゆい。

でも。

姉に対して未だ鬱屈したものを持っている私は、素直に甥に会
いたいとは言えないでいる。

姉のことを、決して嫌っているわけではない。

けどまだ、以前のように屈託なく笑うことはできない。

——あのときから。

のんびり屋さんで可愛い梓ちゃん。

せつかちで、かわいいもの好きな私、弓緒。

三年前まで私たちは仲の良い姉妹だった。

私は、八つ歳上の姉が大好きで、年齢が離れているからこそ、ベ
ツタリ仲が良かったのかもしれない。

休みの日はよく一緒に出掛けたし、悩みや思っていることは何で
も気兼ねなく話せて、逆に姉からも会社の愚痴を聞いたりしていた。
最初に結婚の話を教えてもらったのも私だし、こっそり相手に会

ったのも、家族の中で一番最初。

姉が違う名字になって家を出ていくというのは複雑な感情を私にもたらしたけれど、寂しさは当たり前前のものとして、祝福するつもり——だったのだ。

そう。『だった』。

あれ以来——自分が姉に向ける笑顔は、どこかいつも作ったものになってしまった。

あんなに仲良しだったのに、会ってもぎこちない空気が挟まって、心を許して話すということが、出来なくなってしまった。

原因はわかっている。

わかっているからこそ、どうしようもなくて。

私の頑なな態度に、姉が寂しそうに微笑むのを見るたびに、申し訳ない気持ちと苛立ちが、交互に私を襲う。

今なら仕方のないことだったと、わかる部分もある。
けどまだ、私は彼女を許す気にはなれないのだ——。

「なんか卒業した！ って余韻が全然ないよね」

グレイのラインが入ったスーツを身に当てて、どう？ と尋ねてくる千香に、私は首を振る。

小柄な彼女には似合わないソレを取り上げ、代わりに深い紺色のノースリーブワンピースを差し出した。シンプルな形だけど襟がフ

リル仕立てで、それがカワイイ。生地がしっかりしているので、軽くは見えないし。

「さらば友よって歌ってたときはホロリとしちゃったんだけどー。全然サラバじゃなかったワケだ」

絵美にはオーソドックスなブラックのパンツスーツを。背が高くクールなイメージの彼女によく似合う。インナーや、アクセサリーを工夫したら華やかになるだろう。

にわかスタイリストになっていた私は、よしと頷く。フィッティングルームに二人を押し込んで、そうして、お召し替えの間もかしましく続けられる会話にツツコミを入れた。

「余韻も何も、千香が家に帰ったとたんカラオケ集合メール送って来たんじゃない」

「や、だって。喋り足りなかったし、ちょうど卒業割引やってたんだもんー」

カーテンを開けて出てきた千香がふうと頬を膨らませて、そんな言い訳をする。

おお、カワイイ！ 私が褒め称えると、満更でもなさげにしながらも、でもこのワンピースって入学式には合わくない？ と鏡の中の自分を見て不安そうに眉を下げた。

ちまつこくてかわいらしい千香は、幼い風貌を気にしている。

この間買ったツイードジャケットを合わせたらどうかと提案してみた。

「ま、卒業ってもそのまま大学部に上がるだけだしね。そりや実感わかないわ」

きつちりリボンブラウスのタイまで締めた絵美は、カーテンを開

けた私たちのウケを狙うようにモデルのようにポーズング。
いやアンタ普通にかっこいいし。どう突っ込めと。
うん、合わせるのは大振りのネックレスがいいかな。

大学では家政科専攻、服飾の道に進みたい私は、こういうことを考えるのが好きだ。

衣服の組み合わせや小物による演出。その人に似合うスタイルや色。場面に合わせたファッションセレクト。

二人が私のアイデアを受け入れてくれるから、余計に楽しくて。いつもアレコレと口を出してしまう。

選んだ服と小物を無事購入し終え、両手に荷物を抱えた私たちは、次はどこ行く？ と歩き出し――ふと、絵美が呟いた。

「……しっかしアレだね、入学準備とか口実にして毎日顔を合わせてるあたしたちって、」

「……暇だね」

最後はユニゾンで言葉が揃って、弾かれたように笑い声を響かせた。

高校を卒業したと言っても、たかだか数日前。

まだまだ高校生気分が抜け切れない私たちは、この、どこにも属していないという空白期間を、落ち着かない気持ちで過ごしている。浮かれたような心持ちで。

未来に対する期待と不安と、子どもでいたい気持ちと、早く大人に見られたい思いとの間をフラフラしていた。

大学の入学式を過ぎれば、自覚も出てくるんだろうけれど。

家に居れば、やくだいもないことをつい考えてしまう最近の私にとって、友人と会っているこのときだけは、余計な事を忘れて笑える貴重な時間。

子どもの頃は、高校を卒業すれば大人だと思っていた。
大学生っていうのは、そういった印象を受ける肩書きだ。
でも、一般的に大人と認められるのは二十歳からで。
それにはまだあと一年強もあつて。

——まだ、あと、一年も。

そう、ふとした瞬間に浮かぶ言葉に、苦笑する。
大人になったからといって、私の想いが叶うわけじゃ、ないのに。

買い物を済ませ、お茶して、ブラブラしていたら五時を過ぎていた。夜から別の人と会う約束をしていた私は、慌てて二人に別れを告げる。

これから会う彼と私の事情を知っている千香と絵美に、心得た笑みでガンバってね、なんて送り出されて。

微妙な気分になるじゃない。なにをガンバレというのだ、もう。

——頑張っても頑張っても、私はこの気持ちを表に出すわけには
いかないのに——

自宅よりひとつ前の駅で電車を降り、改札を出てすぐのロータリーに視線をさ迷わせる。

見慣れた車体、その横で手持ち無沙汰に煙草を燻らせている彼を

見つけた。

この間会ったときは、散髪にいく暇もないとボヤいていた髪が短くなっている。

ラフに羽織った淡い藤色のシャツ、黒いジーンズ、ひとつ間違えはどうなの？ ってスタイルも、彼が着ると不思議と似合って目を引く。

彼と初めて顔を合わせたときも、雰囲気がかっこいいひとだなとまず思ったものだ。

「春佳^{はるか}くん、」

呼びかける声に喜色が混じる。抑えようとしても抑えられない。彼が、こちらに気付いて私を認めてやわらかく頬をゆるませるから——ダメだつてわかっているのに、調子に乗ってしまうんだ。

「そんな焦って来んでも構わへんのに」

ショッピングバッグをガサガサさせながら駆け寄る私に、柔らかい西のイントネーションで笑う。

大学からこちらに出てきた彼は、それまで京都に住んでいた生粋の関西人だ。

仕事の時はそれなりに整った言葉を使っているらしいけれど、「そもそも日本の中心は西やつたんやから本来なら標準語は関西弁なんや」と訳のわからない主張をよくする。

西の人って頑として言葉を直さないよね。

私がそう言くと、なんで直す必要があるん、と当然のように言っただれど。

彼が私にネイティブなコトバを使ってくれるのは嬉しいし、その響きも好きなんだ。

携帯灰皿で煙草を消したあと、見上げる私から当たり前に荷物をサツと取り上げて、後部座席に置いて。その量の多さに、彼はからかうように眉を上げた。

「なんや、大量やな。今日はお買い物デーか？」

「うん。入学式に来ていく服とか、ともだちと買いに行ってたの」

私はもっぱらスタイリスト役でしたが。

自分のものは、気に入るのがなかったからまた今度、ということにして、リーズナブルなお店で通学用の私服を買いまくった。

後で組み合わせとか見てほしいな、——と言い掛けて、何か考え込んでしまった春佳さんに気付いた。

どうかした、という私の問いかけに、ハツとしたように彼は首を振る。そうして、助手席のドアを開けてくれる。

何も言わなくても荷物を持ってくれたり、ドアを先に開けてエスコートしてくれる、自然にそういうことが出来る男の人を私は他に知らない。

外国の人でもあるまいし、どういう育ち方したんだか。

「弓緒ちゃんがどんなん買ったんか、後で教えて？」

そう言った彼の表情はドアの影になって、こちらから見えなかった。

私たちの間では、ファッションのことが話題になるのが常だから、彼が興味を示しても不思議にも思わない。現にコーディネートを訊こうと思っていたし。

「私はまだ買ってないの。色々見すぎて混乱しちゃったから、また今度って、」

そおか、と相づちを打った春佳くんはどことなく安堵したよう
——私はやっぱり首を傾げる。

物問いたげな顔をしているそんな私を見て、彼は苦笑した。
おかしな態度を誤魔化すように片手で髪をかき混ぜられ、軽い悲
鳴を上げる。

私が、彼のそんな気安い仕草にどんなにドキドキするかなんて、
本人は全く知らないだろう。

知られては、困るのだ。

かき混ぜられてクシャクシャになった頭に文句を言うと、彼は
ゴメンゴメンとあまり誠意の感じられないセリフを吐きながら笑っ
て、今度は逆に流れを整えてくる。

触れる指先が、いちいち心臓に悪いのでやめてほしい。
駅を通り過ぎる人々の目には、私たちはどう写っているんだろう。

恋人？

友人？

——兄妹？

それが妥当なところかな。あながち、間違いでもない。
私がシートベルトを締めるのを確認してから、彼はエンジンを掛
ける。

「ほな行こか。なんか食べたいもんリクエストあるか？」
「おいしいものー」

当たり前やし、とソッコー返されて笑った。

彼の都合が合う限り、月に一、二回はこうして会って、食事に連れていってもらっている。

春佳くん、なんて呼んでいるけれど、彼は私より十も年上の大人の男性だ。アパレル会社に勤めていて、テキスタイルデザイナー、という仕事についている。

私が服飾に興味を持ったのは、彼の影響が多分にある、だろう。

彼と会うときは、母にはトモダチとご飯を食べてくる、と言って出かけていた。

——ウソではない。友人は、友人、だもんね。

他に、私と彼の関係を表す言葉が、わからない。

彼が、どういつつもりで私と会っているのかも——わからない。

千香と絵美は、それはデートだ、と言う。

でも。——そうであってはいけないのだ。

だって、彼は。

彼は、姉の——

「……春佳くん、このお店高いんじゃないの、大丈夫なの」

本日彼が連れてきてくれた所は、街中から少し外れた隠れ家的なフレンチのお店。

店構えを見て、素敵だと思うのと同時に高そうだと怯んでしまった私に、遅くなったけど卒業祝いだって。

ナイフフォークがたくさんある！ と一瞬焦ったものの、高校の授業でマナー講座があったから、それほどマゴつかずにすんだ。

春佳くんは車だし、ワインの類いは無しにしたからそうお値段は嵩まないと思うんだけど、やっぱりちよつと心配なんだもの。

どうしてメニューに金額が書いてないんだ。

貧乏人の私が貧乏つたらしいことをコソコソ訊ねると、額を指で弾かれた。

「失礼やなー。一応稼いどるっちゅうの、ここらで一食二食したところで金はなくならんわ」

デコピンされた額を擦り、贅沢は敵だよ、と私は唇を尖らせる。趣味が仕事に直結している春佳くんだから、稼いだお金を使う暇もなくて、意外とお金持ちなの知っているけれど。

それを私のために消費するというのが申し訳ない。

かといって、親の脛をカジリまくっているまだ学生の私は、割り勘という手段すらとれないし、春佳くんは春佳くんで、そんなん気にするより笑顔でゴチソウサマ言うてくれた方がずっと嬉しい、なんて甘やかすし。

私をどうしたいのだこの人は。

オトコの基準が春佳くんって、かなり困るんだよ？ そこの男子じゃ太刀打ち出来ないんだってば。

想い切ってもこのままじゃ、彼氏なんて作るの無理。見る目が辛くなっちゃう。

まあ、作るつもりもないけれど——って、つくづく、不毛だ。

私の想いが叶うことはない。

たとえ、伝えることが出来たとしても。

彼がそれを受け入れることはないだろうし、そもそもそういう対象としてすら、見られてはいないのだから。

彼を、困らせるだけだ。

想いを告げて会えなくなるくらいなら、このまま妹としての位置を保ちたい。

だけど、もうすぐこのままではいられない時が来ることも、薄々感じていた――。

デザートまで満足して頂き、今日買った服を春佳さんに説明しながら少し離れた駐車場まで歩く。

車に戻ればあとは帰るだけ。

なるべくその時間を引き延ばしたかった。

会話は大学のことに移り、そういえば、と春佳くんが考える素振りを見せる。

「弓緒ちゃん、アルバイト探すって言うてたんどうなった？」

「んー、まだ決まってるない。大学始まるまで、時間の都合がかわかんないし、休みの間に短期で行くにも、なかなか……」

「……あれっ杉野さん？ お久し振りですー！」

眉をしかめるような大音量で、春佳くんを呼ぶ声が会話をぶった切った。

たった今すれ違った会社員のグループの一人が、ニコニコと近付いてくる。春佳くんの反応から、どうやらお仕事関係の人だと判断し、私は一歩引いた。

「コウセイさん。ご無沙汰してます」

「会社同士は仕事してても、僕らが会うことはありませんもんね。ご夫婦でデートですか……？」

春佳くんの隣にいる私を見て、男性は怪訝な顔になる。

あれ、似ているけど違う——そんな心の声が聞こえてくるようだった。

ああ。知っているけれど、知らない人なんだ。

春佳くんは彼の誤解にちょっと困ったような笑みを浮かべている。男性の同僚らしいひとが彼を小突いて何かをささやいた。——たぶん、あのことを。

「え、でも梓さん子ども産まれたって——」

そんな空気を読まない言葉を漏らした彼は、バカ！　ともう一度小突かれていた。

他の人は事情を知っているのか、すみません、と謝ってくる。謝ることが余計に失礼だっってわかんないのか。

無意識に私はその人たちを睨んでいたのかもしれない。

ポン、と頭の上に春佳くんの手が置かれて、ハッと瞬きした。

「構いませんよ。お互い納得してのことですし」

さらりとした声音に、何かを感じることは出来なかった。

再度謝る彼らに、春佳くんは気にするなと手を振り、私の背中に手を当てて促す。

春佳くんの、もう気にしていないというポーズは、どこまで本当なのか。

あえて、この三年間、その話題を避けてきた私にはわからない。そして未だに確かめることを怖がって、訊ねられないでいる。

私が春佳さんと初めて会ったのは、彼が姉の結婚相手として現れた、三年前の春の日のこと、だった――

(中)

ひらひらくるくる舞い落ちる、小さな桜の花びらを、器用にその手は受け止める。

姉と待ち合わせをしていた駅前で、周りの景色から浮き上がるような雰囲気を持つその人を、私は見ていた。

じっと私が見ていたことに気付いた彼は、首を傾げるようにして微笑んだ。

「弓緒、これ、杉野さん」

はにかんだ姉が隣に並ぶ姿の良い男の人を指すと、コレってなんや、と彼が笑って茶化す。

初めて直に耳にする関西の言葉は、テレビや何かで知るより少しやわらかい。それは恋人に向けるものだからかも知れなかった。

梓ちゃんたらメンクイ、と密かに思いつつ、私はペコリと頭を下げる。

「弓緒です、ヨロシクです」

“杉野さん”は私を興味津々な瞳でじっくり眺めたあと、ぱつと破顔して。

「梓さんの自慢の弓緒ちゃん！ ようやっ与会えたわ」

今よりもまだ背の低かった私の頭をワシワシ撫でる初対面の彼にビックリしたけれど、嫌な感じではなかった。

それは彼の人懐こいコトバのせいかもしれないし、妹になるのだと最初から意識していたからかもしれない。

とにもかくも、初めて紹介される姉の恋人に対する私の印象は悪いものではなかった。

杉野さんと会話をする梓ちゃんは可愛かったし。

ただ、自慢の弓緒ちゃんてなんだ、何を話していたのだ。追及すると、フフフと二人して笑う。もう。

姉の勤務するブランドショップに商品を卸している会社のデザイナーさん、と言うことしか聞いていなかった私は、彼は服を作っている人だと思っていた。

「布？ のデザイナー？ へえ、そんなのあるんだー」

「今俺がやつとんのは、オーナーの……弓緒ちゃんが思ってたような“デザイナー”さんの、デザインした服に合う布を作ったり探したりすることなんやけど。よお無茶言われるけど、バシツとハマるものが出るとそら嬉しいで」

「だから杉野さん、オーナーのお気に入りなんですよ」

梓ちゃんのからかい口調に彼は、うわやメテ！ なんて嘆くフリをしてみせるけど、その笑顔は全くそうは思っていないもので、仕事が好きで、誇りを持っているのだとわかる。

こちらを退屈させないで、自分の仕事について熱く語る彼は、大人の人なのになんとなく微笑ましい。

カッコイイ姿とのギャップも面白い。

こういうところに梓ちゃんも惹かれたのかな。

話上手な彼から聞く糸や布、織物のことは興味深くて楽しかった。梓ちゃんの影響で、昔からファッションにはアンテナを張っていたけれど、そもそも基がなければ服も鞆も小物も出来ないわけで。丁度、将来をぼんやり考えている時期だったから、何かを造り出すという仕事をしている彼との会話に、つい私は夢中になってしまったのだった。

「ごめん梓ちゃん、なんか私スツゴイでしゃばって話してたよね？」
「ううん、弓緒と彼、年も離れてるし不安だったけど、気があったみたいでよかったよー」

三人で食事をした帰り道、梓ちゃんそっちのけで話し込んだことに反省し、謝る。
途中から進路相談みたいになってたし。姉の結婚相手に会いに来たのに何やってんだ私は。

「杉野さんにもね、弟妹がいらっしゃるんだけど、下の妹さんは別れたお母さまが引き取られたとかで、会えないんだって。だから、私と弓緒がうらやましいってよく言ってたの」

——だから、弓緒が仲良くしてくれると嬉しいんじゃないかな。
そう、梓ちゃんはホツとしたように笑ってくれたから。

別れる間際、彼がくれた綺麗な桜の花びらを胸ポケットに入れたまま、密かに覚えた痛みは、忘れることに、した。

それからしばらくして、彼が家に挨拶に来て。特に揉めることも何もなく、梓ちゃんたちの結婚準備は進んでいった。

私はいえ、彼に仕事のことを聞いてから、そっちに興味が出てきて、小物を作ったり、簡単な服のリメイクを趣味とするようになって。

ときどき、作った物を見せてもらって、姉の彼というよりも尊敬する大人のひととして、親しくなっていた。

春佳くんと呼び出したのもこの頃。

杉野さんと呼ぶと固いからヤメテ、なんて言われて、かといってお義兄さんも照れくさいし、春佳さんは女の人みたいだって嫌がるし。

十も歳上の人を“くん”呼ばわりするのはどうかなって思ったけれど、呼び始めたら違和感は無くなった。

梓ちゃんはまだ“杉野さん”なのに变なの、と言うと、お仕事関係では上の人だったから、なかなか切り替えが上手いかわからないのよね、と梓ちゃんにはにかんだ。

思えば、私も必死だったのだ。
淡く芽生えたその想いを隠すのに。

会ったび大きくなる気持ち、姉にも彼にも誰にも悟られるわけにはいかなくて。

お兄さんとして、仲良しになってるんだよ、何にもないよ、というフリをするのに、精一杯で。

——姉の様子がおかしいことになって、気付きもしなかった。

それは、式まであと数ヶ月という時のこと。

友だちと遊びに出掛けていた私の携帯に、春佳くんから電話があった。

それまでメールでやり取りしたり、梓ちゃんとの電話に混ぜてもらったりしていたから、別に構わないのだけれど。

——個人的に掛かってくるのは初めてだった。

電話口に出た、彼の声はいつもの弾むようなリズムではなくて、少し沈んでいるようで、そのことも、いつもと違う雰囲気を感じ取らせた。

友人を気にしながら当たり障りのない会話をしばらくして——こちらから切り出す。

どうかしたの、春佳くん。

返ってきたのは、吐息のような苦笑だった。

『……弓緒ちゃん、また、俺と会ってくれるかなあ？』

わずかな沈黙のあと届いた呟きに、秘めていた想いを悟られたのかと、一瞬言葉につまる。

「え、なんで？ わざわざ訊かれなくても、会うでしょ、」

だって家族になるんだから——、

明るく言い放つはずの言葉は、何故か音にすることが出来ず、静かな無音が私たちの間を漂う。

——ん、ありがとう、またな。

小さく笑った春佳くんは、そう言って通話を終わらせた。
足元が揺れるような不安に突き動かされて急いで家に帰る。
梓ちゃんに訊かなきゃ。

何かあったの、なんか変だったの――

そして、家にたどり着いた私が見たものは。

青い顔をして頂垂れている梓ちゃんと、その隣で土下座してる男の人。

対面に、静かな怒りに身を震わせている父と、困惑した母の姿だった。

「お前たちがまず謝らなきゃいけないのは杉野くんにだろう！」

めったに怒ることのない父が声を荒くし、目の前の二人を叱責している。

母は重いため息を吐き。

姉は、――姉は、隣にいる男性と膝の上で手を繋いで。涙を堪えて強張った表情をしていた。

「もちろん、彼には先に詫びを入れました。いくら詰られても殴られても仕方がないと思っていました。なのに彼は、子どもがいるならご両親に早く話した方がいい、と……」

彼はきつと誠実な人なんだろう。父のきつい眼差しにも怯まず、まっすぐに言葉を発していた。

でも、だけど、それが何だというのだ。

「――なにそれ」

私がそこにいたことに誰も気付いていなかったのか、一斉に視線がこちらへ向いた。

姉が眉を曇らせる。

「弓緒……」

「どういうこと？ その人誰？ ——子どもってなに」

言いながら、私は答えを聞くより先に知っていた。

さっきの電話で聞いた彼の沈んだ声。

そして、この状況。

そういえば最近梓ちゃんは春佳くんと会っていなかった、彼の仕事が忙しいからかと思っていたけれど私が送った息抜きメールに返事は来てたよ、連絡をとる様子もなかった、何で？

どうして？

互いを守るように、知らない男と手を握り合う姉は、じっと私を見つめる。

もう、どんな非難も聞く覚悟をした目をしていた。それが何よりの答え。

「信じらんない……」

これ以上ここにいれば後で後悔するような酷い言葉を吐きそうだった。

踵を返して家を飛び出す。制止の声が聞こえたけれど、無視して。

梓ちゃん、何で？

何で春佳くんを裏切ったの。
子ども、ってなんなのよ。

式場を見に行ったり、結婚式までのスケジュールを話し合ってたの、この間のことじゃない。

いつから。
どうして。

疑問の言葉ばかりを繰り返し、私はいつの間にか駅前の広場にポツリと立ち尽くしていた。

どこへ行こうと思ったのか。

春佳くんのところになど、行けるはずもないのに。

かといって、家に戻る気にもなれないで、近くのベンチに腰を下ろした。

あの人と一緒にいたってことは、梓ちゃんはもう、春佳ちゃんと結婚する意思はないってことで。

梓ちゃんのお腹の中にはあの人の子どもがいて。

どうして。

どうしてそうなったのよ。

春佳くんに想われているくせに――

冷静になれない。

これから一番大変なのは姉だ。 婚約破棄、今までしてきた結婚の準備も白紙に戻さなきゃならない。

まだ式の招待状を出していなかったのは幸いか。

だけど姉と春佳くんの結婚の話は、勤務先にも知り合いにも知られているはずだ。

二人の間に何があったのか、身内と言えども結局部外者である私

にはわからないけれど、婚約者である春佳くん以外の人との子どもがいるということは、姉に非難が集まるのは必至。

味方にならなきゃいけないとわかっているのに、春佳くんのことを思うと、どうしても、梓ちゃんをなじる言葉しか出てこない。

その時点で、私はあんなに仲の良かった姉より、彼を取ってしまったことに気付いていた。

どうして話してくれなかったの。

——私が、春佳くんになついていたから？

こんなことになるなら、どうして春佳くんと会わせただの。

——会わなければ、こんなに、辛くならなくて、済んだのに。

ひどい、となじる心の裏側にある、自分勝手な言い分は見ないふりをして、ひたすら姉を責めた。

「——弓緒ちゃん！」

どのくらいそこにいるのかわからなくなった頃、慌てたような彼の声が耳に飛び込み、私は瞬く。

ゆるりと顔を上げると、走って来たのか髪を乱した春佳くんがいて。

瞬きを繰り返す私の前に辿り着くと、安堵したようにしゃがみこむ。

「……梓さんから、弓緒ちゃんがおらんようになったって連絡が——見つかった良かった……」

深く息を吐いた彼の言葉に、私は唇を噛んだ。

梓ちゃんのバカ。

どうして春佳くんに連絡したりなんてするの。彼を裏切って傷付けたくせに、私のことで煩わせるなんて、最悪だよ。何考えてるの。私のバカ。

それでもこうして春佳くんが心配して探してくれたのが嬉しいなんて——もっと最悪だ。

「ごめん、なさい……」

私の小さな声に、春佳くんがしゃがみこんだ姿勢のまま、顔を上げる。

ベンチに座る私より少し目線が低い。

彼を見下ろせるなんて滅多にあることじゃないのに、涙を堪えるのに必死でそれどころじゃない。

私が泣くのは違う。

私が泣く権利なんてない。

「ごめんなさい、ごめ……」

ギョツと目を閉じて謝罪の言葉を繰り返していた私は、息を飲んだ。

気付けば立ち上がった春佳くんの腕に抱き締められていて。

涙腺が決壊した。

「弓緒ちゃんが謝ることなんかなんもない。梓さんこうなってしまったのは、俺が悪かったんやから」

彼の胸に顔を押し付けた状態のまま、首を振る。宥めるように頭を撫でられて、そのやさしい仕草が、余計に辛かった。

——違う。違うの。

違うんだよ、春佳くん。

私が謝っているのは、姉が貴方を裏切ったことに対してじゃなく、自分の醜い気持ちに対してなんだよ。

——梓ちゃんを責める言葉の裏で、貴方が姉の恋人じゃなくなつたことを喜ぶ、醜い私がいることを。

貴方が恋人に裏切られたことを喜ぶ、こんな私を気にかけてくれる、それを嬉しいと思う、思ってしまうことを——謝っているんだ。

ごめんなさい。

ごめんなさい、ひどい女の子でごめんなさい——

あんな風に飛び出して、どんな顔で帰ればいいのか渋る私を宥めて、春佳くんは家まで送ってくれた。

私と同じように泣き腫らした目をした梓ちゃんが、何か言いたげにしていたけれど、まだダメだった。

ゴメン、と一言だけ残して自分の部屋へ閉じこもる。

そのあと、みんなでどんな話し合いがされたのかよく知らない。姉にもあの人にもひどい言葉を吐くのが嫌で、ずっと閉じこもっていたから。

それからすぐに、春佳くんと予定していた式よりずっと簡素な——地味な、身内だけの結婚式を挙げて、姉は家を出ていった。おめでとうは言えなかった。

ただ、気を付けてね、と少しお腹が大きくなった姉に告げて。

距離を、置いた。

甥が生まれる頃には、一応、何も知らない人が見れば普通の姉妹に見えるくらいには、私の態度は軟化していたと思う。

姉にもいろいろあって、そうするしかなかったんだと、頭では理解することが出来たから。

お義兄さんも、春佳くんのことを考えなければとてもいい人だし、姉を愛しているのは充分にわかった。

だけど——いつまでも消えない彼への想いと共に、姉に対する複雑な気持ちは無くなりはしなかった。

『——弓緒ちゃん？ 元気にしとった？』

その電話が掛かってきたのは、季節が二つ過ぎたある日のことだった。

手にした携帯から聞こえる声が信じられなくて、私は言葉を失う。無言になったこちらにどう思ったのか、明るい第一声とは違う、困ったような声音が続いて。

『……ゴメン迷惑やったかな。今日仕事で外歩いたら、桜が咲いとるのに気付いて——なんや弓緒ちゃんと話しておなったんや』

何か言わなきゃって思うのに、音になってくれなかった。

おんなじだよ、春佳くん。

私も。

私も、貴方を思い出していた。

くるくる落ちる花びらに、嬉しそうに笑っていた、初めて会ったあの日のことを。

貴方と姉の恋人として出会ったのは、ちょうど今の季節だったか

ら。

どうしてるかな、って。

——会いたいな、って。

彼を裏切った女の妹である私が思っではいけないことを、思っていた。

「……春佳くん、も、元気？」

たったそれだけを返すのに、ものすごく気力がいった。

私が答えたことにホッとして笑う吐息が聞こえて、どうしようもなくなった。

——好き。

姉の恋人だった人を好きだなんて、辛いだけなのに。

彼は気の合う妹としてしか、私を見てくれないのに——寂しさを埋める、代わりでしかなくても、かまわない。

電話をくれた、その理由がどんなものでもいい、たったひとつ繋がった細い糸にしがみつくようにして、会う約束に頷いた。

久しぶりに会った春佳くんは、少し痩せたみたいで、ちゃんと食べてる？ と私が眉をひそめながら言うと、頬を緩めて。

心配してくれんの、嬉しいなあ、って、バカみたいにニコニコするから、実は緊張していたことなんてどこかへ行ってしまった。

梓ちゃんのことなんて無かったみたいに、会話して、進路のアドバースを受けて、ほんのたまに、彼の作業室を見学させてもらった、拙いながらも女子高校生なりの意見も出したりして。それは以

前と変わらず。

多忙な社会人の彼に合わせる形で、月に一、二回逢っただけだったけれど、少しも嫌じゃなかった。その時が楽しみだった。

そうして、春を二巡り。

梓ちゃんの話題が全く出ない、それが不自然すぎることをわかっていながら、擬似兄妹の関係を続けていた。

でも――。

（後）

空気の読めないお仕事関係者さんのせいで、車に戻っても私たちはずっと黙りこくったまま。

無いものとしてきたことを、浮き彫りにされてしまったのだ。

私たちのこの関係は、梓ちゃん無しには語れない。

私たちのこの関係は、梓ちゃんがいれば有り得なかった。

——ホントウどちらも真実。

静かにハンドルを握っていた春佳くんが、私を家の近くで下ろす段になってから、呟いた。

「弓緒ちゃん、来週、空いてる日あるかな？ 見せたいもんあるねん」

気まずいまま別れて、また一ヶ月後だなんて嫌だった私は、その春佳くんの申し出に一も二もなく頷いた。

どうしようもない、私。

外はどんどん明るさを増して春めいてくるのに、私の気分は鬱々とスツキリしないものを抱えていて。

数日後、春佳くんから入った待ち合わせのメールに指定されていたのは、姉が来る日だったから。

ちようどいい、先に出掛けてしまえば顔を合わせなくて済む、なんて考えて、また自己嫌悪。

恋をして、綺麗になるなんて嘘。

私はどんな嫌な子になる。

そんな自分が嫌なのに、彼を想うのは、止められないんだ。

その日の待ち合わせ場所は春佳さんの作業室だった。

アトリエってデザイナーらしく呼べばいいのに、そんなカッコつけはイヤやと例のごとく訳のわからない持論でみんなにも作業室と呼ばせている、彼の城。

仕事仲間でもない私が自由に出入り出来る権利を、再会してから春佳くんはくれたけれど、一度も無断で訪れたことはなかった。

今は特に進行中の仕事はないのかお休みだからなのか、作業台は片付けられていて、私を招き入れた彼は、さつさと奥へと進む。

別に足音をひそめる理由なんてないのに、私はそろそろとそのあとに続いた。

一番奥、春佳くんが仮眠室に使っている部屋のドアを開けて、立ち止まった私を振り返る。

ドウゾと促されて、部屋を覗いた私の目に、——外の晴天に負けないくらいの青が飛び込んだ。

窓際にポツリと佇むトルソーには、仄かに光沢のある布地で作ら

れたドレスが着せられていて。

肩口から裾にかけて淡くなる不思議な風合いの、空色のグラデーシヨンに目を奪われる。

ドレスはラウンドネックで上体の作りは至ってシンプル、七分袖の袖口は少し開いて。スカート部分はアシンメトリに流れ、どうやってているのかクシुकシユと裾にフリルのようなウェーブがつけられている。

風に揺られているような、シルエット。

「春佳くんの新作っ？ スゴイ、スッゴイ綺麗だねー！」

さっきまでの気まずい雰囲気はどこへやら、それを目にした瞬間私の頭の中では、どんな風に小物や上着をコーディネートするかなんて勝手に展開されている。もう、これは癖と言つか条件反射のようなものだ。

触っていい？ と許可をもらって生地指先を走らせた。

トロリとした色味に反して、生地自体は少し固め。近くで見ると、編み方を凝らして光沢を出しているのがわかった。

スゴイ、と思うのと同時に、何故か悔しい。

こういうものを創れる春佳くんに、身の程知らずにも嫉妬めいた感情を抱いてしまう。

経験と才能には勝てないのに。

ちくしょー私だって！ と思ってしまうのだ。

感嘆、驚喜、それから不服に表情を変える私が可笑しかったのか、春佳くんが吹き出す。

むっとして睨むと、また頭をかき混ぜられて。

だから、心臓に悪いんだってば――

唇を尖らせて文句を言おうとすると、先回りした訳じゃないだろ
うけれど春佳くんが信じられないことを言う。

「ほなコレに着替えて」

トルソーのドレスを示して。

啞然と見上げた顔は、有無を言わせない笑顔だった。

……はいー？

何でとかどうしてとか一切私に言わせないまま、着替えのために
春佳くんは部屋を出ていく。

残された私はいつになく強引な春佳くんに対して文句をつぶやき
つつ、トルソーから脱がせたドレスを身に纏う。

素肌に触れるヒンヤリした裏地と、シャラリと擦れる布の音に心
を浮き立たせながら。

何故かサイズはピッタリ。

試作品なのかな、着てみた感想とか聞かせろってことなのかな、

普段はこんな鮮やかな色を着たことのなかった私は、ちよつと気
恥ずかしく思いながら部屋の隅にあった姿見の布を取り払った。

「――良かった、やっぱり似合うとる」

鏡の中の自分の姿にポカンとしていた私は春佳くんが戻ってきたことに気付いていなかった。

パツと振り向くと、満足そうな表情をした彼がいて。空色に包まれた私を眺めていた。

目を細めてこちらを見る彼から、何故か隠れなくなる。

くる、と視線から逃れるように後ろを向く。——鏡があるので無駄だった。

うつ、と内心で呻いていると、私が照れているのに気付いているらしい春佳くんがくつつくつ笑う。

鏡の中にいた私は、子どもでもなく大人でもない、娘だった。狭間にいるもどかしさなんて感じないくらい、曖昧さが逆に魅力になるような、女の子。

やっぱりスゴイ。

そして、こんな素敵なものを作り出せる彼を、やっぱりどうしようもなく好きだと思ってしまうんだ。

初めて着た春佳くんの服は——デザインしたのが誰だかは知らないけれど、布地は彼の作ったものに違いないからそう言ってもいいよね——しつくり身に馴染んで、買えるものならお小遣いをハタいて購入したいくらい。無理だけど。春佳くんとのブランドはものすごくハイクラスなんだもの。

私がウズウズしているのを見透かしたように、春佳くんは奥からサンプル品の入った段ボールをいくつか引つ張り出してくる。

好きなようにコーディネートしていいよと言われて、瞳を輝かせた。

布地や風合いこそ変わっているけれど、型自体はシンプルなもの。上着やアクセサリーの合わせ方次第でどんな雰囲気にも出来る。

例えば入学式には。マオカラーのボレロと合わせて、小さなパールのネックレス、靴はミュール、それとも逆にローファー？

今日みたいなデート日和には、もう少しカジュアルな方がいいけれど。

姿見に写る自分と、適当に引つ張り出した小物を交互に見て、頭の中でイメージした物に手を伸ばした。

「そう来たか」

ずっと私のすることを黙って眺めていた彼は、仕上がりを見て、面白そうに呟いた。

「……ダメ？ 変？」

所詮庶民な女子高校生。

普段春佳くんが目にしているセレブなお嬢様方とは流行も合わせ方も違うだろう。

私が選んだのは革のライダースジャケットにストラップサンダル。小花柄のロングスカーフはクルツと巻くだけにして。

ちょっとゴツイめのブーツでも良いかななんて思ったんだけど。

「いや、弓緒ちゃんらしゅうて可愛いよ。やっぱり違うなー」

……わりと普通のコーディネートだと思うんだけど、こちらの商

品をお買い上げになる方々は違うのかしら。

合いそうなレース編みのカーディガンもあったんだけど、甘くなりすぎるかなと却下。

まだそこまで開き直れない。

「なあ弓緒ちゃん、バイトするならうちでせえへん？ 今度、若い子向けのカジュアルダウンしたブランド、立ち上げることになったんやけど、モニターになってくれんかな」

ぐるんと勢いよく振り返った私に春佳くんが引く。

「やりたい！ やるッ！ ……でも、いいのかな……？」

私なんかで。

勉強はしているけれど、ド素人だし。邪魔になったりしないだろうか。

「俺は自分の目を信用しとる。もちろん、ガッツリ働いてもらうで？」

不安に俯いた私の頭をポンと叩いて、しっかり吸収しいと付け足す春佳くんにうんと頷いた。

彼が生み出す世界を近くで見たいられる。

——バイトに入れば、もっと傍にいられる。

その分、離れられなくなることもわかっていたけれど。

「よっしゃ。ほな行くでー」

じんわり喜びを噛み締めている私をヨソに、ひとつ伸びをして春佳くんはドアに向かう。

行く？　ってドコに。

「せっかく可愛くしたんや。出掛けんとな？」

「ええ！　ちょ、ダメだよ汚しちゃうよ弁償出来ないよー！」

「そんなん構わへん」

あたふたする私を引つ張って、春佳くんは何が楽しいのかニヤニヤしたまま外へ向かった。

押し込まれた車の中でもずっと文句を言って、でも流されて。

「靴は減るんだよ、汚れちゃうんだよ、はっ、まさかバイト代を現物支給なの……！」

「どんなけケチャねん。さ、おひいさん着いたで」

それまで全然行き先を気にしていなかった私は、車から降りて辺りを見回したとたん――動きを止めた。

「……春佳くん？」

「なに、弓緒ちゃん」

私を見下ろす春佳くんは微笑みを崩さず、何も知らない風だった。今日、梓ちゃんたちがここにお花見に来てるなんて。

知っているはずがない――。

だけど私の手を引いて、歩いていた春佳くんは桜を見るわけでも

なくキヨロキヨロと誰かを探していて。

——ああ、おった。

そう呟いた先に、居たのは——

桜の下に佇むほっそりした姿を見つけて、私は立ち竦む。

手を振る春佳くんを見、ためらいがちにこちらへ向かってくる、よく知っている人、

「ご無沙汰してます、杉野さん」

「うん、久しぶり。元気そうでよかった」

空々しいまでに当たり前に会話を交わす二人に、私はギュッとスカートを握りしめた。

ああ、シワになっちゃう。せつかくの——

「弓緒？ それ、杉野さんが作ったのよね。よく似合ってる」

ふんわりした声が私に向けられたけど、混乱していた私は答えることが出来なかった。

どうして、春佳くん。

なんで？

弓緒ちゃん、と私を呼ぶ春佳くんの声に、顔を上げて——まるであのときのように並ぶ二人に、たまらなくなつた。

暖かい春の匂いと。

くるくると桜の花びらが舞い落ちる光景。

「……弓緒ちゃん！」

繋がれた手を振りほどいて私はその場から逃げた。

「——ああもう、年寄りに急な運動させんといてえや」

履き慣れない靴のせいか、それほど行かないところで私は折ってきた春佳くんに捕まる。

強く腕を捕まれて、引き寄せられたけれど顔を背けて拒否の意を示して。

「ずっとマトモに話してへんのやろ？　もう、俺のことはええさかい、仲直りしい」

駄々っ子だ、わかっていたけれど頭を振る。

大人対応をする春佳くんにも梓ちゃんにも腹が立った。

私一人が、こだわっている。

「弓緒ちゃんも、いい加減もとに戻りたいやろ」
「……や」

宥める彼の声が更に意地を張らせるということに気付いていないんだろうか。

もとに、戻る？

なんにも無かったみたいに？

そんなの無理だ、それは私の想いも白紙に戻せってこと？

——こんなに好きにならせておいて、もう無理なのに。

「ヤダ……っ」

掴まれた手をもう一度振りほどこうともがいたけれど、それより先に、それより強く、抱きすくめられ——涙が止まる。

「……弓緒ちゃんが梓さんと仲違いしたままやと、俺らは先に進めへん」

ギュツと、頭を彼の胸に抱え込まれて。

吐息が、耳にかかる。

身動きも出来ずに、自身の激しい鼓動と、それと変わらないくらいの速度で動く、春佳くんの心臓の音を聞いている。

「——その服な、弓緒ちゃんイメージして作ってん。糸から編みから色目、デザインも、ぜんぶ」

抱きしめられた肩が跳ねる。

その声に、言葉に、ザワツと鳥肌が立って——ピリピリと神経の末端まで歓喜が走った。

『糸から編みから色目、ぜんぶ』

春佳くんの行為が、どういう意味を含むものかなんて、疎い私にだってわかる。

物を作るはしくれだもの。

——本当に？

弓緒ちゃんが好きや、と、聞き取るのも困難な小さな声に、全身が震えた。

「……かなり、悩んだ。弓緒ちゃんより、十も歳上のオッサンやし、一度は、兄になるはずやったし——弓緒ちゃんは俺になついてくれてたけど、同情かな、て」

首を振る。

抱きしめられているから、わずかな動きだったけれど、春佳くんにはわかったはずだ。

背中に回した手で、しがみつく私の気持ちにも。

「……うん、年の功かな。なんとなく弓緒ちゃんの気持ちも分かったけど——梓さんとのことが、ブレーキになって。節操のない男や、て思われとうなかったし」

絞り出すように告げられる言葉に強く頭を振る。

「そんな、こと、思わないよ……！　だって、あれは、梓ちゃんがつ」

「先に心変わりしたんは、俺や言うても？」

不意に彼の腕が緩んで、私は顔を上げた。

見上げた春佳くんの瞳は暗い。なのに、無理に微笑んで。

「最初は、妹が出来るんや嬉しいな、って浮かれてるだけやと思って。俺の仕事に興味津々で、尊敬の眼差しが気恥ずかしゅうて、

キラキラした目で見つめてくるの、可愛いなあて」

私の熱の集まった頬に手をあてて、春佳くんは三年前を思い出すように、顔を覗き込んできた。

バレバレだった自分が居たたまれない。

「梓さんはおつとりで、優しい人やったから、俺の仕事には口出しせんし、いつもニコニコ話聞いてくれて、ホッとした、そういうところ好きやと思うてた」

梓ちゃんの名前に、語られる思いに、唇を引き結ぶ。

梓ちゃんの恋人だった春佳くんの気持ち、今、私に向けてくれる眼差し、節操がないだなんて思わない。

それを言うなら私の方が、ずっと――

「……けど、弓緒ちゃんに会って――会ったびにコロコロ表情も印象も変わる女の子に、いつの間にかもつと惹かれてた」

成長期の女の子、油断できんな。目が離せんかった。

そんなことを言うから、ますます顔が熱くなる。

「先に気が付いたんは、たぶん梓さんやったんやろうな……。俺は上司に言われるまで気いつかんかった。――弓緒ちゃんをイメージした物ばかり、作つとることに」

目眩がする。

私が、春佳くんの作り出すものにどんなに魅せられて心酔しているかわかってて、そんなことを言うの。

間接的に、姉を裏切っていたのは彼なのだと告白したも同然な内容に、泣きたいくらい嬉しい私の方が――ずっとずっと罪深い。

「そんな俺に、不安になった梓さんが、傍でずっと真摯に、彼女を想っていた彼に傾くのは、当たり前やと思う」

……お義兄さんは、梓ちゃんの職場と同じビルのテナントに入っていた会社の人で。

以前から、友達付き合いはあったのだと、頑なに姉夫婦を避けていた頃、母から聞いた。

全然知らなかった。

梓ちゃんが悩んでいたことも、私じゃなくてあの人に相談していたことも。

——当たり前だ。気持ちの上で、裏切ったのは、私が先だったんだから。

知らなかったとはいえ、当事者だった私に話せるわけがない。

梓ちゃんを責める裏側で、ずっと抱えていた罪悪感がささやく。

——私が春佳くんを好きにならなければ、姉は春佳くんと幸せになっただけかもしれない——

——あの出会い方がなければ、春佳くんに惹かれることもなく、春佳くんと姉の仲がおかしくなることもなく、今頃二人は夫婦として暮らしていたかもしれない——

でも、そうすると甥っ子のリョーマは生まれていないわけで。

“もし”を繰り返しても何もならないのに。

「ホンマは、土下座せなあかんのは俺やったんや」

——ひどいと責められなきゃいけなかったのは、私。

「あんなに仲良う笑いあっとった姉妹を、俺が壊してしもうた。――せやのに、弓緒ちゃんが欲しい、思う。ヒドイやろ？」

違う。違う、違う。

ひどいのは私。

姉の恋人に一目惚れしたあげく、気持ちを抑えるどころか一直線に落ちた。

そして浅ましくも、一緒にいられる方法を考えていた。

「……梓ちゃん、春佳くんを裏切るなんてひどい、そうなじった理由、ホントは、」

春佳くんを思いやった訳じゃない。

もっと利己的で、我が儘な理由。

姉と、別れた彼。

——もう、好きだと思っても、後ろめたくない。

元婚約者の、妹。

——どんなに好きだと思っても、いい顔をされるわけがない。

どちらにしても辛いことしか見えなくて、私は、梓ちゃんに八つ当たりをしていたんだ。

春佳くんから身を離して、少し距離を置いた場所でじっと待っていた梓ちゃんに向き直った。

私の視線を受けて、ふと淡く笑んだ姉に向かって走り出す。
ちっちゃい頃みたいに、抱きついた。

「——ごめんね、梓ちゃん、私、春佳くんが好きな。好きになっちゃったの、ダメだってわかってたのに」

本当は、あの時言わなきゃいけなかったコトバ。

梓ちゃんは全部わかってる、という様に頷いて抱きしめ返してくれた。

「わたしも。あんな風に逃げるみたいに、別の人と一緒にになって、ごめんね。もつとちゃんと二人とぶつかって、話していれば、気持ちを隠してずっと悩ませることなんてなかったのに……」

それは違々と首を振る。

私が自分のことだけしか考えず姑息に振る舞ったことを、梓ちゃんが気にするのは間違ってる。

ずっと、ずっと苦しかった。

——梓ちゃんなんかもうキライ。

そう拗ねてそっぽを向いている間も、変わらず見守ってくれた大好きな姉を、否定し続けなきゃいけないことが苦しかった。

「……梓ちゃん、大好き」

「言う相手が違うでしょ？」

ぎゅうと甘えるようにしがみつく私に苦笑して、ほらと背を叩く。
なんや妬けるわあ、っておバカなことを言っている春佳くんの方

へ私を促して。

きつと、私の狡い心なんて最初から梓ちゃんは分かったた。だけど柔らかく笑って、ただ私を許して、待っていてくれた。

自身の過ちを認めるときを。

やっぱり梓ちゃんは大人で、私のお姉ちゃんで、私は全然子どもで。

なのに、いいの？——こんな私で、いいの。

「弓緒ちゃんこそ、ええの？」

歳の差激しいし、オッサンやし、もと姉の婚約者ってだけでも厄介やのに、多忙なときと暇なときの落差が激しゅうてロクに会えへんし、そもそもそれがダメになった理由でもあるし——

次々に出てくる春佳くんの不安材料に、可笑しくなった。

おんなじようなこと、考えてたの。

コドモだし、もと婚約者の妹だし、まだ学生だから自由なようできて自由じゃないし、いろいろと問題もある。

例えば、お父さんたちに知られたらどうなるか、とか。世間的にどうなんだ、とか……。

でも、そんなこと全て押し退けて叫ぶ、強い想いが自分の中にある。

受け止める用意をしてる彼に真っ直ぐに向かう。

「春佳くんが、好き」

くるくる落ちる花びらに手を伸ばすひとを見た、あのとくに、

私はもう、恋に落ちていた――。

春色フリーフォール F i n .

(後) (後書き)

Copyright (c) 2010 - 2011 Mitsuki
Siki all rights reserved.

初出: Webアンソロジー #2 【春色フリーフォール】・10年0
3月16日了 / 50枚

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6761v/>

春色フリーフォール

2011年8月10日22時21分発行